

## Q7. 間接指導を行うときは、どのように指導すればよいですか？

複式の授業づくりにおいて、最大の課題は間接指導をいかに行うかである。直接指導と関連しないドリルなどの作業学習に終始してしまわないように、学習のねらいに基づいて、児童が自主的・主体的な学習を展開して自ら学び、自ら考える時間になるようにする。間接指導の時間をそのような充実した時間とするためには、その直前の直接指導の在り方が重要になってくる。その際のポイントは次の三つである。

- 学習課題を明確に示し、ゴールを具体的に確認する。
- 課題の解決方法を示し、見通しをもたせる。
- 活動が終わった後や、活動が停滞したときにどうすればよいかの確認をする。

1 単位時間の中で、こうした教員の明確な指示が間接指導には必要になる。しかし、日々の積み重ねができれば、教員の簡単な指示で活動できるようになってくる。「話合いの前にノートに自分の考えを書く」「話合いの後は、ノートに分かったことを自分の言葉でまとめる」「まとめは話し合う前と後でどのような考えがどう変わったかを書き、その理由も書くようにする」など、学習経験として具体的に方法をつかめば、学習リーダー（司会進行役）を中心に、ある程度自分たちで学習を進めることができるようになる。

それでも、話合いを深める、互いの考えを深め合う場面においては、教員の問い返しや話合いの整理が必要となってくる。事前に児童の反応を予想し、授業のねらいに迫る主発問を用意しておくことが重要である。

低学年でも簡単な学習活動は自分たちで進められるようにしたい。その際、先回りして教員がたくさんの指示を出さないようにしたい。立ち止まったときにどうするのか、自分たちが考える場を奪ってしまうことにもなりかねない。



また、学習の手順・方法を全員が確認できるように、板書で示したり、掲示したりする工夫も大切である。学習リーダーだけが知るのではなく、みんなで学習を進める雰囲気や支持的な学級風土を大切にしたい。「まずみんなの考えを出し合おう」「みんなの考えを仲間分けしたらいいのでは」「そろそろ話し合ったことをまとめてみよう」など、学習の進め方に対する意見を出し合うことが「学び方」を学ぶことにつながるのである。上学年の学習の様子を下学年が見る活動も取り入れるとよい。上学年に学習のモデルを示してもらおうのである。その際、事前に教員が上学年に「こうした活動を下学年に見せてほしい」という指導もしておく必要がある。

複式学習のルールを決めて徹底させることが大切！！

- 誰かが話しているときは、きちんと最後まで聞く。
- 間接指導時は、先生に指示された問題を自分一人で、又は友達同士で解く。
- 分からないときや困ったときがあった場合は、すぐに先生を呼ぶのではなく、まずは自分で考える。それから友達と相談する。
- その場に合った適切な声の大きさと話す。

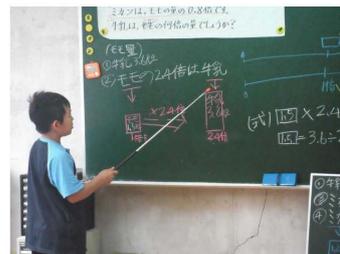
\* 学習のルールの定着に向けて、特に大切な授業展開のポイント

- 課題をしっかりとつかませること
- つまづきを予想し手立てを用意しておくこと

### Q 8. 主体的な学習を進めるために何が重要ですか？

「複式学級を担任すると授業観が変わる」という言葉をよく耳にする。学習の主体は児童である。教員の役割は、目標を設定し、そこに子どもたちが自然に向かうような仕掛けを工夫したり、方向性を示し、後押ししたりすることである。

主体的な学習が成立するためには、学習の主体である児童が明確な目的意識をもっていること、目的実現のために具体的に何をすることが分かっていること、それらを支える基礎的な力を身に付けていることが重要になってくる。



### Q 9. 学習ガイドの効果的な活用には、どのようなものがありますか？

「ガイド学習」とは、児童が主体的に学習を進めていくために、教員の主導のもとに考えられた学習の流れや活動を、児童の司会進行によって進めていく学習形態をいう。その際に、学習進行の計画を示したものが「学習ガイド」である。

「学習ガイド」の提示の方法は、全員にプリントして配る方法、司会進行役の児童だけに書いたものを渡す方法、黒板に掲示する方法など様々である。児童の主体的な学びの創造は、問われ続けてきた教育課題であり、間接指導を行う複式学級における、「ガイド学習」への取組や研究が重要である。



例えば、見守り型支援の充実に指導の力点を置くことが考えられる。司会進行役は日直が輪番で行うことで、全員が経験できるようにする。児童が自ら進んで学習できるようになるために、「学習ガイド」の活用に向けては、次のことをポイントとして取り組む。

低学年	中学年	高学年
<ul style="list-style-type: none"> <li>具体的な言葉を書いた学習ガイドを教員が準備し、全員に配布し、ノートに貼って進めるようにする。</li> <li>練習問題や答え合わせなどの場面など簡単な活動は、ガイドなしで進める場をできるだけつくるように配慮する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習ガイドを教員と子どもで準備し、それをもとに進行役の児童が自分の言葉に置き換えて進めるようにする。</li> <li>練習問題や答え合わせの場面だけでなく、簡単な話し合い活動では、ガイドなしで進めることができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>黒板に貼ってある活動カードを基に、自分の言葉で学習を進めるようにする（ガイドは基本的に使用しない）。</li> <li>特に話し合い活動では、考え方を仲間分けしたり、話し合うことの焦点化を図ったりすることができるように配慮する。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>学習はみんなで進めるものだという意識を大切にし、互いに声を掛け合うように働きかける。</li> <li>子どもたちが試行錯誤しながらも学習を進めようとしている場合は、教員が待つようにする。</li> </ul>		

ガイドは児童が見通しをもって学習する上で欠かせないものである。しかし、ガイドがなければ学習を進めることができないというのも目指すところではない。ガイドのとおりに進めることが絶対的にならないよう配慮が必要である。

### Q10. 複式学習指導において効果的な教室環境は、どのようなものですか？

複式学習指導においては、黒板や机の配置、教育機器の導入、指導者の立ち位置など、複式ならではの工夫をすることが大切である。(p10参照) また、思考の道筋を明らかにする上で、効果的な教具として、タイマーやストップウォッチ、プロジェクタや実物投影機、黒板に貼り付けができるホワイトボード(クリアファイル)、ヒントカードやチャレンジカードなどがある。また、児童が主体的に調べることができるように国語辞典やパソコン等を配置しておくことよい。

※児童が自由に使えるように、それぞれの使い方の指導を徹底しておくことが大切である。

ヒントカード：解決のヒントが書いてあるプリント等

チャレンジカード：発展的な問題が書いてあるプリント等



〔クリアファイルの発表用ボード〕



〔ヒントカード(算数科)〕

### Q11. 一人一人に話す力を付けるためには、どのような方法がありますか？

話す力は実際に話すことを繰り返すことによって身に付く。どう話せばよいかをいくら頭で理解しても、話す力は身に付かない。複式学級は少人数なので、実際に一日の生活の中や、一授業の中で話す活動は多い。その一つ一つの機会を児童の成長に結び付けるようにする。話型を示すことは有効である。また、自分の思いを実際に自分の言葉で話すことも大切にしていく。

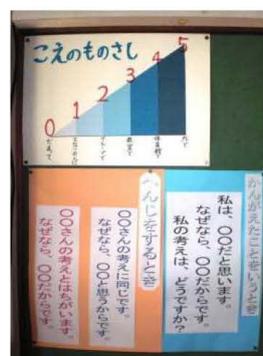
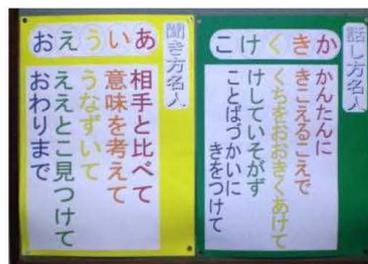
日常的に、しかも意図的に話す力を付けていく活動として、朝の会で行うスピーチ活動は有効である。テーマを決め、話し手の児童はそのテーマに沿ったまとまった話をする。話が一方通行にならないように、聞き手が感想を発表する場も設ける。そうすることで、言葉のやりとりが人と人との関係の中で生きた言葉のやりとりへと変わっていく。

#### 【スピーチ活動の具体的な展開例】

- 1 「今からスピーチ活動を始めます。今回のテーマは□□□です。今日の話し手は○○さんです。題は△△です。」
- 2 話し手によるスピーチ
- 3 「感想を書いてください。」(3分間)
- 4 「感想を発表してください。」(7分間)
- 3 「話し手の○○さんは、みんなの感想を聞いて、どう思いましたか。」
- 6 「先生からです。」
- 4 「これでスピーチ活動を終わります。」

※全員発言することを基本とする ※司会者は話し手の次の出席番号の児童

この際のポイントは次の二つである。



### ○活動するに当たって（事前指導）

- ・テーマに即した具体的なエピソードや考えを入れて話すように指導する。
- ・原稿やメモを準備することはよいが、見ながら話すことはしない。聞き手に向かって話すように指導する。



### ○活動を終えて（6の「先生から」）

- ・話し方だけでなく、話の構成や内容の取り上げ方、終わり方などのよいところを具体的に取り上げてほめる。

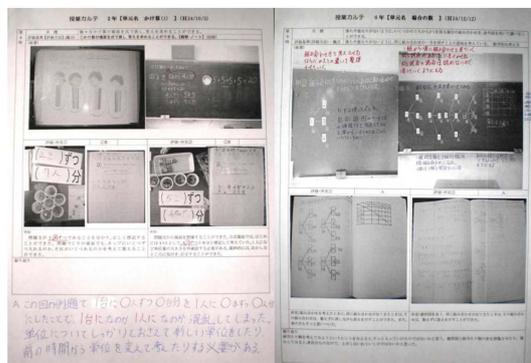
## Q12. 学習の評価は、どのようにしたらよいですか？

複式学級だから、単式学級とは違った特別な評価・評価方法があるということはない。直接指導における評価については、学習の目標を明確にし、規準を設定してその達成度を児童の具体的な姿や学習記録などを基に評価することが大切である。また、間接指導における評価については、児童の実態と本時の指導内容を踏まえた上で、発表に使ったホワイトボード、児童のノート、ワークシート、自己評価シート（振り返りシート）などを評価資料として行う。

複式学級は、少人数であるので全ての活動において児童の変化を捉えやすい。児童が自らの伸びを実感できるような教員の言葉かけを、折に触れ行うとともに、児童の様子や変化をきめ細かく記録し、計画的に評価していくことが大切である。

### ○取組例1【学習カルテ】

授業の記録を残し、目標は達成できたのか、分かりやすく指導できたのかを振り返り、教員自身の授業を見直すのに効果がある。指導者は、単元の指導と評価の計画を立て、それに沿って授業を進め、毎時間の板書やノート、活動の様子を写真に撮り、児童の様子を所見として残す。また、できあがったカルテは、全体で研修を行い、授業において改善すべき点や次回、同一の



単元を指導する教員への参考になる点をピックアップし合った。研修した内容はカルテに書き込み、次回の類似単元や次年度の同一単元での参考となるようにする。

### ○取組例2【到達カルテ】

各児童の単元の評価テストを綴り、その間違いの傾向・定着度の分析を行う。ファイルの見開き右面には、児童のテストを綴り、左面には実施日、問題の正誤、間違いの傾向、今後に向けた改善事項を指導者が記入する。また、このカルテは児童本人にも提示し、間違いの傾向を共有し、共に力を付けていこうと確認し合いながら取り組む。



（取組例1、2は十津川村立西川第二小学校の実践による）